

歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」は、各地区公民館・教育委員会事務局にて、一冊四、〇〇〇円（税込み）で販売中です。ぜひお買い求めください。第二巻「中世編」は一月二十四日より販売開始です。

町史編さん室では、『近江日野の歴史』を編さんするため、古文書調査・民俗調査・地名水利調査をはじめ、さまざまな調査を、皆さんのご協力のもとで進めてきました。今回は、日野商人西田治兵衛家に伝来した古文書から、江戸時代の商品の運送について紹介いたします。

### 小谷家と西田家

荷主である小谷庄三郎は、大窪町出身の商人で、宮城県仙台に出店し、主に売薬と陶器を取り扱っていた商家でした。詳細な経営については史料を欠くためわかってはいませんが、同じ仙台に出店していた中井源左衛門家文書などによると、産地に近接する立地を活かし、仙台や山形から紅花の仕入れも行っていたようです。

今回、運送経路を追いかける荷物は、この小谷庄三郎店が仕入れた紅花です。紅花の荷主は前述した通り小谷

庄三郎ですが、荷物が出されたのは栃木県壬生にあった西田治兵衛店からでした。小谷店から西田店へ紅花が渡された経緯を知ることはいませんが、西田家は村井出身の商人で小谷家とは縁戚関係にあり、商売上でも互いに扶助しあう間柄であったことが西田家に伝わる古文書から窺えます。

### 紅花の運送

紅花の栽培は江戸時代に最も発達し、特に山形・仙台・福島など東北地方の紅花の生産額は、日本全体の半数以上を占めていました。紅花の需要地は主に京都で、小谷庄三郎が仕入れた紅花の御先も京都四条室町にあった「伊勢屋源助」と、同じく四条烏丸の「伊勢屋利右衛門」という紅花問屋でした。

栃木の西田治兵衛店から出された紅花荷物は、江戸まで陸路で運ばれたようです。運送には、日野の商人組合である「日野大当番仲間」

と特別に契約をした飛脚問屋（運送業者）の「嶋屋佐右衛門」や「京屋弥兵衛」を利用しました。特に嶋屋は東北や北関東など、日野商人の主要出店地にも支店を展開する大規模な運送業者で、史料によると「海上受合」と呼ばれる保険も請け負っていたようです。「海上受合」とは、現在でいうところの貨物海上保険のことで、万が一荷物が破損・紛失した場合は、この保険によつて荷物の弁済が保証されました。

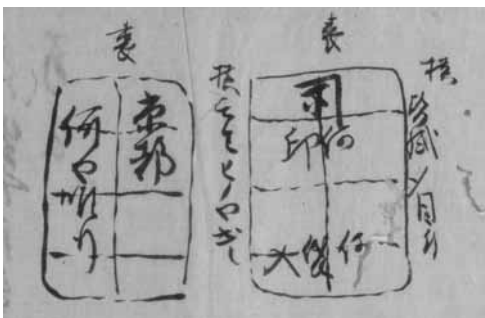
保険が掛けられた荷物は江戸から海路大阪へ向かいます。大阪へ着くと荷物は積み替えられ、淀川を登り伏見へと送られます。伏見で再度積み替えられ、さらに登り京都の紅花問屋へ卸されます。

ちなみに、荷物の運賃は、江戸から京都まで一駄につき二両二分でした。

小谷庄三郎は、生産者と問屋の間に介在する中継ぎ商人であった

と考えられます。こういった中継ぎ商人の存在は、遠隔地との取引にあたり、さまざまなリスクを軽減させるために必要であったと考えられます。小谷庄三郎は、産地の生産者から見れば上方の市場に詳しく、また京都の問屋から見れば産地の相場に目が利くという点で、中継ぎを担うに相応しい人物であったのでしょう。

こうした中継ぎの事例は他の日野商人家でも見られます。詳しい日野商人の実態については、平成二三年刊行予定の第七巻「日野商人編」に掲載予定です。どうぞご期待ください。



▲紅花荷物の梱包図。横には重さと差出を示す「壬生ヒノヤ出し」、表には総量、裏には「京都何や誰行」と宛所が書かれた。